

被災地発 支え合い活動事例集

支え合う倉敷 つながり合う真備

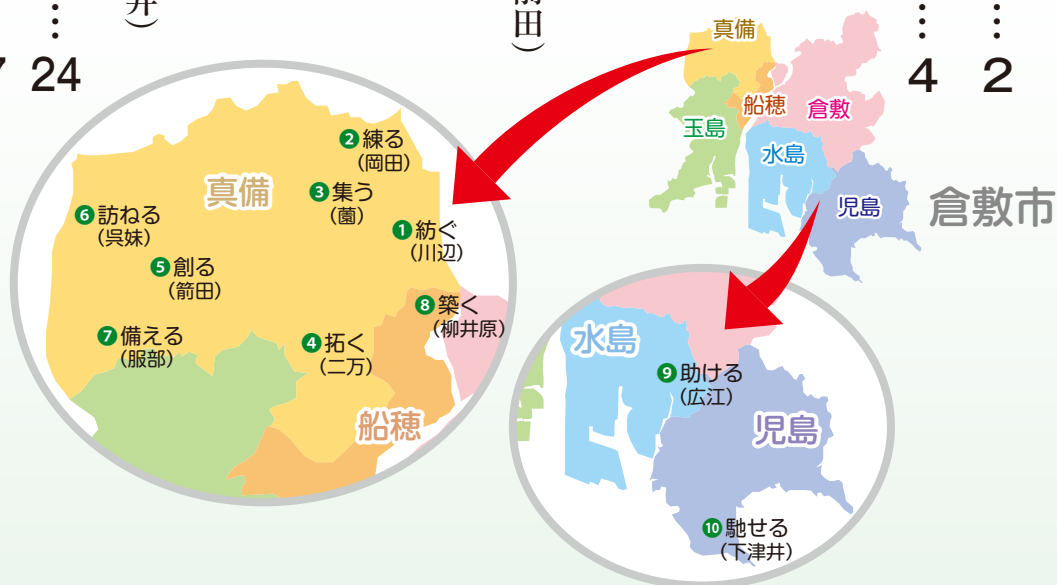
豪雨ニモマケズ



contents

も く じ

①	はじめに.....	1
②	地域のチカラ.....	2
③	被災地発支援合い活動事例紹介.....	4
1	紡ぐ川辺復興プロジェクトあるく (真備:川辺)	
2	練る岡田分館での集い (真備:岡田)	
3	集う有井女子会 (真備:蘭)	
4	拓く二万仮設憩いのBar〈場〉 (真備:二万)	
5	創る箭田の集いの場『ほつとスペース』 (真備:箭田)	
6	訪ねる呉妹訪問型サロン (真備:呉妹)	
7	備える見守り支援合い訪問 (真備:服部)	
8	築く柳井原トレーラー仮設団地 (船穂:柳井原)	
9	助けるサテライトひろえ (水島:広江)	
10	馳せる下津井地区災害ボランティア (児島:下津井)	
④	支援合いのチカラ.....	24
⑤	生活支援コーディネーターがつかえます.....	37



1 はじめに

「災害に負けない支え合いの地域へ」

平成30年は、地震、大型台風の到来、記録的な猛暑など、日本各地で大規模な自然災害が数多く発生しました。

とりわけ倉敷市においては平成30年7月豪雨災害により多くの方が被災し、今もなお、住み慣れた自宅や地域を離れて生活を送る方も多く、被災地復興はこれからが本番と言えます。

今回の豪雨災害は甚大な被害を私たちに与えました。

災害が起こらないようにすることは、現在の人の力では限界がありますが、日頃から「備え」、日常の暮らしのなかで地域の気になる方を「見守り」、災害発生時には地域のつながりのなかで「支え合う」、災害に負けない地域づくりを世代や立場の垣根をこえて、これまで以上に進めていくことが重要です。

被災地やその周辺の地域に目を向けてみると、復興に向けた支え合いの萌芽は至る所にみられ、これまで地域が大切に育ててきた絆や文化を活かし、被災者・被災地を支えながら、復興に向かっていく「支え合い活動」を数多く知ることができました。

この「被災地発支え合い活動事例集『豪雨ニモマケズ』」は、そのような支え合い活動の取り組みや地域で活躍する支援者「支えびと（ささえびと）」を紹介する情報等をまとめたものです。

災害だけでなく、高齢化、人口減少、担い手不足、孤立化等すべての地域の課題解決の糸口にもなる支え合い活動や元気な地域づくりの実現に向け、多くの方にこの事例集をご活用いただき、被災地の復興や支え合いの地域づくりの一助となれば幸いです。



② 地域のチカラ

「豪雨が奪ったもの」 地域のつながりが取り戻すもの」

たくさんの方が「いつまでも、暮らし続けたい」と願う『住み慣れた地域』。

この言葉のなかには一人ひとりが自分らしく、幸せに暮らしていくためのたくさんの要素がつまっています。

住み慣れた地域には、自分の落ち着く「自宅」があり、自宅以外でもそこに居るとホッとできる「居場所」もあります。

これまでの住民同士のつながりのなかで生まれた「なじみの関係」や「マイペースな生き方」があることが、地域での生活をいつそう輝かせてくれます。

「自分の役割」があり、「癒し」があり、「思い出」がつまった地域だからこそ、多くの方がこの場所で生きていきたいと願うのです。

豪雨は地域と住民のこれまで積み上げてきた大切な宝物を土砂に埋め、水で押し流してしまいました。しかし、これまでの地域でのつながりや安心感があるからこそ、「再びこのまちに帰りたい」「この人たちと一緒に生き続けたい」と願い、その実現に向けた意思や取り組みは、新しい地域づくりの原動力となっています。

住み慣れた地域





「非常時でも日常でも

目指すのは「暮らし」にたくさんの「き」がつく支え合いの「くらしき」

暮らしに寄りそう

日頃のつながりがあるから、いざという時に助け合うことができます。「お互いさま」「ついでだから」寄り添う支援が日々の暮らしと地域のこれからを支えます。

■日常

- ごみ出し ●掃除
- 電球交換 ●草刈り
- 買い物 ●送迎 等

■災害

- 家屋の片付け ●相談
- 見守り支援 ●移動支援
- 生活支援物資のお届け 等

暮らしが交わる機会

出会いや、話し合いのきっかけ（機会）は地域の色々なところにあります。きっかけづくりを応援することで、「支え合い」はいつそう加速します。

■日常

- 「通いの場」
- 地域の交流会
- 小地域ケア会議 等

■災害

- 居場所や交流の場づくり
- 避難所や仮設住宅でのサロン 等

暮らしに気づき 気づかい・気配りを

お互いの暮らしに関心を持つことから「支え合い」は、始まります。愛情ある人への気づきは気づかいと気配りへと広がっていきます。

■日常

- 挨拶 ●声かけ
- 井戸端会議 ●見守り 等

■災害

- ご近所さんの状況や連絡先の把握
- 被災者のニーズ把握と相談 等



- 「暮らし」に「気」づかい・「気」配りを
- 「暮らし」が交わる「機」会を大切に
- 「暮らし」に「寄」りそう
- 「暮らし」の場に「帰」ってこられるように
- 「暮らし」の場をより良くする「企」画を
- 「暮らし」に「喜」びや「希」望を



一人ひとりの「暮らし」が「輝く」まちづくり



災害を通して得た3要素が地域づくりの推進力に

1

愛情 普段は何気なく暮らしていたこの地域。災害が起きて、まちの景色が変わって改めて気づいた、地域のあたたかさや心強さ。「このまちで暮らしたい、このまちを守りたい」。「わがまち」に「わがごと」意識が芽生えたとき、愛情あふれる地域づくりの第一歩を踏み出します。

2

危機意識 「次に同じような災害が起きた時、どのように対処したらいいだろう?」「家族や近所の人を守れるだろうか?」大きな被害を受けた経験と教訓は、必ずこれからの防災意識や日頃からのつながりづくりに活かされます。

3

きっかけ 一人ひとりの支え合い意識が地域の支え合い活動へ広がるために、みんなで集い、話し合う「きっかけ」も大切です。今回の災害は被災地以外の地域でも、日頃からのつながりづくりだけでなく、同じ倉敷の住民として被災者・被災地にどのような関わりができるかを考える大きな契機となりました。



かわべ
川辺

③

被災地発
支え合い活動事例紹介

災害をきっかけに地域が動き始めました。これまでの地域のつながりが被災地の復興を後押ししています。そんな地区ごとの取り組みをご紹介します。



「川辺復興プロジェクト あるく」



毎日午前中に開所している交流スペースでは、おしゃべり、レクリエーション、創作活動などやりたいことを楽しみます。
「あるく」のスタッフも毎回2名は常駐し、暮らしの相談にも応じています。

地域交流スペース
「あるく」

開所日時：毎日
9:00～12:00
場所：川辺小学校敷地内
(倉敷市真備町川辺720)
内容：住民同士の交流・情報
交換・イベント開催等

多くの人が集まって、子どもたちの声が響いていた元気な川辺の景色を取り戻したい…。
豪雨により地区の99%の世帯が床上浸水に見舞われた川辺地区で、住民中心の復興に向けた新たな挑戦が始まりました。
避難生活でばらばらになった住民同士のつながりを**紡ぎ**、地域を再構築するためには、家の復旧も必要ですが、心が満たされる場や出会いのきっかけづくりが大切です。
そんな思いを受けて「川辺地区まちづくり推進協議会」の榎原さんを中心に結成した「川辺復興プロジェクトあるく」は、30代から60代までの多くの担い手によって運営され、川辺小学校に設置されたプレハブは地域のイベントや居場所づくり、情報発信等の拠点となっています。

地域のつながりかみしめて
確かな一歩をふみしめる



7月9日から無料通信アプリLINE（ライン）でグループ「川辺地区みんなの会」をつくり、被災者や支援者みんなが登録し、地域のイベント情報や川辺の様子を発信し情報共有を図ってきました。

平成31年1月現在、約550の方が登録しています。このLINEを活用して、現在の居住地や地区に戻る意向などをたずねるアンケート調査を実施し、地域の声や課題を知ったことで、住民が気軽に集える交流スペースの立ち上げにつながりました。

8月からスタートした毎日開催の炊き出し支援。地元のスーパーマーケットが再開する10月中旬まで約2カ月間にわたって、食事を通じた地域の交流の場として大きな役割を果たしました。



地域交流スペース参加者のみんなで作ったクリスマスカードを幼稚園の子ども達に配りました。あたたかい居場所から、あたたかい支援が生まれています。

川辺の支えびと

私たちは「支えびと」であり「支えられびと」

まきはら 槇原 聡美さん X まつだ みつえ 松田 美津枝さん



何でも話し合える関係性が素晴らしい、槇原さん(左)と松田さん(右)

「あるく」の代表を務める槇原さんと相談役の松田さん。気心した関係性が「あるく」の活動の推進力となっています。二人はまるで本当の親子のように何でも話し合い、よく笑い、とにかく前向きです。地域愛にあふれた二人の魅力に惹かれながら住民・支援者のネットワークが広がっています。

地域での子育て支援を行っていた松田さんと槇原さんが親子サロンで出会って13年、二人の交流は今も子育てや地域での活動を通して続いています。今回の災害での活動を振り返り、二人は今まで地道に続けてきた地域活動の意義について語りまします。「これまでのつながりがあったからこそ今があつて、みんなが活動を支えてくれている。私たちは『支えびと』であり『支えられびと』です」二人の笑顔がとても心強く感じます。



一歩前へ！その先へ！これからも地域と一緒に復興の歩みを続けます！



「岡田分館での集い」



岡田を思う気持ちが集まったら

これからの岡田が見えてきた

発災後、岡田地区の公民館「岡田分館」では、ボランティア活動のサテライト拠点として、多くのボランティア活動の現場調整を行ってきました。

そこに、被災の状況に関係なく地域の方が集い、ボランティアの道案内や詳しいニーズの把握など、よりきめ細かい支援が行われました。そして、ボランティア活動の合間には、自然と住民同士がそれぞれの心境を語り合ったり、これからの地域の事を話し合ったりする場が生まれました。

「ここに来たら、誰かに会える」岡田分館は、地域のなかの常設の居場所となり、少しずつ被災した館内の片づけをして、多くの人が集まるイベントが行えるまでになりました。岡田地区で練ってきた「大きな夢」が広がる出発点は、ここでの「何気ないおしゃべり」からでした。



地域の方が地図を確認し、ボランティアの活動先を教えてください。地元住民だから分かる「気づき」と「気配り」で新たなニーズも発見できました。

発災後、PTAと連携した「秋祭り」、百人以上が集った「歌声喫茶」、大船渡市との交流から生まれた「さんま祭り」など、多くのイベントが実施されました。

イベントに集うことで、久しぶりに再会される方も多く、至るところでおしゃべりに花が咲きました。遠方に避難されていた方も、みんなに会うために戻ってきました。



岡田の支えびと

岡田のこれからを岡田のみんなと考えたい

おか の 岡野 てる み 照美さん (左) X て ぐ ち 出口 こう じ 浩司さん (右)

これまで接点のなかった二人が災害支援をきっかけに出会い、多くのイベントを作り上げてきました。岡野さんと出口さんの作戦会議は、時に真剣に、時に漫才の掛け合いのように行われています。みんなが「楽しむ」ための作戦会議を「楽しみ」ながら続けてます。



自分たちだから出来ることをしようと、ボランティアの方に被災の体験を「伝える」活動を行う岡野さん



岡田の活動を記録する出口さん。優しい視点で岡田の復興を見守っています。

「岡田地区まちづくり推進協議会」で活動されている岡野さん。「このまちを良くしたい」その想いから、幅広い世代とつながり、イベントの企画をしている岡野さんのもとに、多くの協力者が集まります。

岡田分館での災害ボランティアの支援がきっかけで集まってくれた男性の中には、「もしボランティアに来ていなければ、自分は家から出ていなかったかも」という方もいます。家や畑、仕事道具が被災した人など、状況は様々ですが、それぞれが自分の役割を考えて、出来ることをしています。その積み重ねが、岡田分館に集うみんなの笑顔につながっています。そして、そんなたくさんの方々の協力者の中には、アイデアが豊富で、地域情報の発信役も担う出口さんの姿もあります。



「有井女子会」

「みんな」で過ごした菌だから
「みんな」が帰れる場でありたい

末政川が決壊し、有井地区を中心に大きな被害を受けた菌小学校区。自宅だけでなく、地域の集いの拠点の多くが浸水し、使うことができなくなりました。

決壊箇所のすぐ近くにある下有井公民館は奇跡的にわずかな補修で建物を活用することができたため、災害ボランティアセンターの下有井サテライトとして、その後は地域住民が気軽に集い、戻ってくることでできる復興の拠点として新たな歩みを始めました。

発災から4カ月が経ち、下有井公民館に懐かしい顔ぶれが戻ってきました。これまでは下有井地区限定だった対象を有井地区に広げて開催された「有井女子会」復活の日には、いたるところで抱き合い、再会を喜び合う女子たちの姿がありました。

気心知れた仲間同士で集い、おしゃべりができる地域の居場所は、みんなの帰りを待っています。



有井女子会

開所日時：毎月第3木曜日
13:30~15:00

参加者：有井地区の女子
内容：おしゃべり・情報交換
・レクリエーション等
場所：下有井公民館

夏の間、下有井公民館は災害ボランティアセンターのサテライトとして沢山のボランティアさんの前線基地となりました。



「有井女子会」の他にも、地域のお母さんや子ども達が気軽に集える場所として開放されている下有井公民館。お母さんたちは水に浸かった写真を洗浄して、持ち主にお返しする写真洗浄ボランティアも始めています。



仲良しさんがいてくれて、近況を話すだけで会場は笑いと元気に包まれます。第2・第4木曜日の午後からは「蘭ふれあいカフェ」もオープンしました。

蘭の支えびと

奇跡的に残った下有井公民館で奇跡のような出会いがありました。

あさの 浅野 静子さん X たびしようにん はら 亮章さん

長く、民生委員や地区社会福祉協議会の会長として蘭地区を見守り続けている浅野さん。自宅が被災したにも関わらず、地域のため、住民のために休むことなく地域での支援活動を行っています。

下有井公民館をボランティア活動の拠点にするために力を尽くし、地域のなかで気になる方と支援をつなぐ役割も果たしています。「有井地区は大きな被害を受けた地区だけど、これまで培ったつながりはきっと災害を乗り越える」そう信じて、居場所づくりを全力でサポートしています。



震災後いち早く、埼玉から出身地である倉敷に戻り、被災地支援活動を開始した原さん。特に被害の大きかった有井地区を担当しました。

原さんは「災害NPO旅商人」としてボランティア調整や地域のつながりづくりの仕掛け人だけでなく、珈琲屋さんという顔もお持ちです。住民が集うイベントや夜の町かどにキッチンカーで登場し、優しいあかりと落ち着く笑顔、美味しい珈琲で来る人の心を温めます。



再会をあたたく見守る浅野さん



一杯一杯、原さんが思いを込めて珈琲を淹れてくれます。旅商人のキッチンカーにはいつも人と笑顔が集まります。



「二万仮設憩いのBar〈場〉」

開かれた仮設の「居場所」で語る夢

地域の未来も拓きます

二万仮設団地に併設された談話室は、住民同士で話し合い、朝から夕方まで開放することに決めました。これによって、談話室は誰でも気軽に立ち寄って、おしゃべりや情報交換ができる場になりました。

ほぼ毎日、仲良しになった女性たちが自然と集い、お茶を飲みながら交わす言葉には、これからの復興や地域づくりに大切なアイデアが散りばめられています。

「私も女性はこの風になんか集まれるけど、男の人は全然来んなあ・・家に居るばあじゃ、良うねえなあ」

「男は酒でもねえとおえんじやろ」

そんな、談話室での雑談から、住民みなで企画して実現したイベントが「二万仮設憩いのBar〈場〉」です。仮設住宅の住民に加えて、お世話になっている二万の地域の方にも声をかけました。

飲み物とおつまみ一品を持参して、バーのママはいつも談話室に集っている女性たちが担当します。

男性もたくさん参加をしてくださる、このBarが今後の支え合い活動や一人一人の活躍の場へと拓かれていきそうです。



いつもはわが家のママさんが、今夜はBarのママに変身。



おかやまコープさんの企画で毎月1回サロンを開催しています。

12月はクリスマス飾りとケーキを作り、みんなで美味しく食べました。



「クリスマスシーズンは、イルミネーションを飾り、明るい光で暮らしの場を盛り上げたい」

寄贈された電飾の取り付けは、住民自らが脚立にのぼり、みんなで楽しみながら行いました。

夜になると電飾をまとった「光の木」が、とても美しく輝き、仮設団地を照らします。

左の写真は、電飾の寄贈や設置に協力してくれた支援者さんに感謝の気持ちを込めた食事会の様子です。このイベントも住民自らが企画し、地元のまちづくり協議会等が応援して実現しました。

二万の支えびと

一人ひとりの元気が仮設団地や地域を元気にできると信じています

談話室に集う女性たち



おしゃべりをしながら、支援物資をたたんだり、しっかり手も動かしています。



Barの企画もこの談話室の作戦会議で生まれました。抱え込まず、みんなにいつでも相談できる環境ができています。

仮設団地のなかでの取り決めは、連絡員の中島さんを中心にみんなで話し合います。団地の住民に細かく声をかけ、談話室でざっくばらんにおしゃべりをしながら、方針を決めていきます。

談話室が常時開放されていることにより、支援団体ともつながりやすくなりました。衣類などの支援物資を提供する団体は、物資を談話室に置いていくことで、住民も自分の都合の良い時に物資を選びに立ち寄ることができます。

中島さん一家



仲良しの8人兄弟は、寒い日も元気にボールを蹴っています。

中島さん一家は、元氣な8人の男の子とご両親の10人家族。仮設団地の連絡員も担います。子ども達は全員サッカーをしており、取材にお邪魔した日も、元氣に外でサッカーボールを蹴っていました。

同じ団地の住民は「子ども達の明るい声を聞くと、気分が明るくなった」、仮設団地の中に居ても日常を感じることが「できる」と話します。

子ども達の元氣が家庭や地域に元氣を広げてくれています。



や た 箭田



「箭田分館前ほっとスペース」

「箭田の集いの場＝『ほっとスペース』」

「会いたい」「話したい」

思いの分だけ誕生した

地域の「ほっ」とする場所

「真備に帰って来ても人に会うことがねえんじや」

「家を直すんが自分んちだけじゃったら」

「あの人はどうしよんじやろ」

そんな住民の方々の思いから、見知った人と話ができる地域の集いの場が数多く誕生しました。

箭田での集いの場は「ほっとスペース」と呼ばれ、「できるだけ隣近所の人達で交流がしたい」という思いに応えるため、集まりやすい場所、馴染みのある場所等、地域の特性に合わせて4カ所に創られました。

「ほっとスペース」を何カ所も創ることで、より暮らしに近い場所が集まることができ、また参加する場所が増えることで自分の予定に合わせたマイペースな交流が生まれました。



境地区ほっとスペース

しゃべり場の1つ、境地区ほっとスペースでは、元々近所の方が集まっていた倉庫を地域に開放し、老若男女問わず話がはずむ場所になりました。倉庫の所有者の妹尾さんは「町内の人が寄れて話ができるなら」と二つ返事で場所を提供してくださいました。

まきび公園ほっとスペースは、敷地も広く、車も駐車可能であったため、箭田地区以外からも参加者が大勢訪れました。

他の地区の方と交流を持つことで、情報の共有化や、新たな支援者と知り合えるきっかけづくりとなり、人と人との出会いの場を創りだしたほっとスペースです。



坪田地区ほっとスペース



まきび公園ほっとスペース



坪田地区ほっとスペースでは、災害により離ればなれになってしまった地区の子どもたちが、久しぶりの再会に喜び、遊び出す姿もみられました。大人だけでなく、子ども同士のつながりも支えているほっとスペースです。

箭田の支えびと

「ここに来れば、誰かに会えてしゃべって帰れる。そういう場が必要だと思った」

ひるだ すみじ
蛭田 純司さん



真備よろずチーム研究所、箭田地区社会福祉協議会の方
(中央 蛭田さん)



支援物資配布場所箭田分館前

また、箭田分館長、箭田地区社会福祉協議会、地元の有志、真備よろずチーム研究所の方々等も協力者として参加され、箭田の支援物資の配布場所は、笑顔溢れる場にもなりました。

地域の方は、「支援物資を取りに行った際に、『地域の顔なじみ』がいるというのは、大きな心の支えになる」と話します。

猛暑のなか毎日、支援物資の配布場所を整え続けた蛭田さんは、「地域の方の声を丁寧に拾いながら、少しでも必要なものが必要な人に届くように」と汗を流されました。

蛭田さんは、箭田地区で被災した地元住民のため7月10日から有志で始めた物資配布に12月末日まで関わっていました。



呉妹^{くれせ}



「呉妹訪問型サロン」

7月の災害以降、「情報が入ってこない」、「物資が不足している」、「ご近所さんと話せる場がない」という住民の声に対応するため、呉妹では、住民、ボランティアによって「訪問型サロン」を立ち上げました。

軽トララックに、生活支援物資や被災者支援情報、お茶のセット等を積み込み、地域を訪ねます。地域の拠点も被災しているので、訪問先の倉庫や車庫がサロンの会場となります。

みんなが集まりやすい場所に向いて、気軽に集える居場所づくりを応援すること、忙しいなかでも、ちよつとお茶をしながら話し、自然と笑顔が戻ってきます。

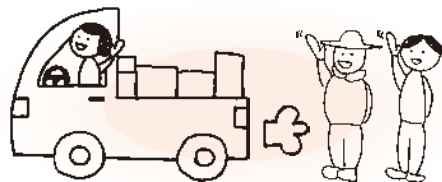
今まで当たり前にできていた世間話が、笑顔と気持ちを つなぐ ないで 日々の 安心を 紡ぎだします。

「また来るよ」と「また来てね」が
笑顔と気持ちを つなぎます

自宅のお掃除をしているかたにお声掛け



「家のことせんといけん」時間までにはおいとまします



ご近所さんにもお声をかけて
お茶を飲みながら情報交換



自宅で片付けなどの作業をされている方々に声をかけ、歩いてこれる距離で集ってもらい、支援物資の配布や情報提供、お茶をしながらご近所さんとおしゃべりの場を実施しました。会場はご自宅のガレージ等をその時、その場でお借りしました。

「どうしょうたん」「これからどうするん」といった情報交換から「最近、疲れてしもうて何にもする気がおきんのよ」と顔なじみが集まると今まで言えなかった本音も言える。ほっと一息できる場となりました。



なじみの顔がそろると自然と話がはずみます

呉妹の支えびと

「やってみようや」がみんなの背中を押してくれる

もりもと
森本

つね お
常男さん



呉妹地区社協メンバーさん



呉妹地区社会福祉協議会の会長として活躍されている森本さん。みなし仮設で生活をしながら呉妹の自宅を再建されています。被災してわずか2週間後に集まることが出来た役員さんと「がんばろう呉妹」というイベントを企画し、支援物資の配布や今後の相談をする場所として被災した地域の人々を元気づけました。

みなで集まって、たくさんアイデアが出ると何から始めようか、何をしたら呉妹のためになるだろうかと悩み、立ち止まることもあります。そんな時、会長の「やってみようや」がみんなの背中を押してくれます。



月1回は池ノ上公民館に集まって、呉妹の状況や今後のことを話し合います。





なか お けんいち けんいち 研一さん (左)、大島 おおしま ちとせ 千登世さん (右)

「見守り支え合い訪問」

**日頃からの顔の見える関係づくりが
尊い命を救う備えとなった。**

災害が発生した7月6日夜10時頃、真備町服部に住む大島さんは、何も知らずに寝ていたところ、町内会長の中尾さんから連絡を受けた親戚に助け出され難を逃れました。

中尾さんは、近所の住民から「近くの川が異常な水量に達している」との報告を受け、日頃から服部地区小地域ケア会議で作成していた見守り支え合い調査票をもとに、緊急連絡先に連絡、「川が異常だ！ 迎えに行けるのであれば迎えに行つて！ 無理なようであれば自分が助けに行く！」と伝えたとのこと。

この取り組みによって命を救われた大島さんは、「避難勧告が夜遅くに発令されたことと、高齢で耳も遠いし、雨音で何も聞こえない状況で、何もわからずに寝ていました。親戚に緊急連絡をしてくれなかったら、今頃はこの世にいなかった。本当にありがとう」と当時の状況と感謝の言葉を述べられました。



中尾さんは、「見守り支え合い調査票」を今でも大切に保管されており、「役が代っても後任に引き継いでいけるように取り組んでいきたい」と話します。



7月8日午前中の服部地区



みずかわ つよし
水川 毅さん

服部地区小地域ケア会議の委員長の水川さんは、「見守り支え合い調査票は災害時にも役立つが、日頃から、気軽に声かけができる関係づくりのきっかけになればと取り組んできた。困ったことがあれば、ひとりで抱え込まず、皆で助け合っていくことが、様々な課題の早期解決につながると思う」と語っておられました。

見守り支え合い調査票は発災後にも役立ちました。日頃から地域の情報を把握していた地域の強みを活かし、災害ボランティアセンター服部サテライトでは、地域の方と一緒にニーズ調査を実施しました。復旧、復興においても、そのつながりの力は活躍しています。



地域の方と災害ボランティアの皆さん

服部の支えびと

みんなどこに居るのか……。みんなに会いたい……。

「集いの場」の盛り立て役 せざき ひろこ
瀬崎 宏子さん



第1回目服部地区集いの会



再会された方々のなかには、「あんたが帰ってくるならわたしも帰ってくるよ」と抱き合う方もおられ、つながりを再構築するきっかけづくりの場となりました。今も服部地区集いの会は継続されています。

そんななか、服部地区に住む瀬崎さんは、自身の自宅が全壊しているにも関わらず「地域のためになるのであれば」と、ご主人が経営されていた板金塗装工場跡地を提供され、9月下旬に「第1回服部地区集いの会」を開催しました。

自宅の復旧が進むなか、9月中旬に被災した人から聞こえてきたのは、「みんなでもう一度集まりたい」という声でした。しかし服部地区では、以前まで地域の集まりの場であった真備公民館服部分館が全壊し、すぐには復旧も困難な状況でした。



や な い は ら
柳井原



「柳井原トレーラー仮設団地」

この場所で出会った人

この場所での支え合いが

これからの財産になっていく

柳井原仮設団地は、全国で初めて、各地からトレーラーハウスを集結させた応急仮設住宅です。色とりどりのトレーラーハウス51戸が建ち並びます。

団地内には、住民同士が顔をあわせ、交流ができるよう集会所が併設されているほか、話し合いで選任された4名の連絡員さんが、情報や交流をつなぐ役割を果たします。入居者同士の支え合いに加え、心強いのは、地元柳井原地区の存在です。仮設団地内の交流会や食事会の支援や仮設団地内で不足している駐車場を確保できるよう地域で調整するなど、仮設団地を地域の一員として受入れ、愛情を込めて見守っています。

団地内・地区内で、新しい支え合いの関係を築くことで仮設団地の集会所を「被災者だけでなく、地域みんなで活用したい」という意識も芽生えています。12月に開催されたコンサートでは、地元住民や隣の高齢者施設のスタッフ・利用者を招待しました。

柳井原仮設団地は支援を受ける場から地域づくりとともに進める場へ広がりを見せていきます。



【クリスマスコンサート】日頃お世話になっている地域の方やお隣の施設の利用者さんをご招待。せっかくのイベントだからこそみんなで楽しみたい。



集会所で開催されているサロンの様子。この日は、好きな皮革を選んで、オリジナルのコインケースを作りました。仲良しの女性陣はみんなでワインレッドのコインケースで揃えました。

クリスマスイルミネーションを飾り付けた後「せっかくだから点灯式しよう」の声。急きょ決まったイベントでしたが、すぐに連絡員さんが手分けして、案内に走ります。



柳井原の支えびと

せっかく用意してくれた集会所。これを活用してみんなが元気にならな、もったいない

いけだ 池田
ただし 忠士さん



柳井原仮設団地の連絡のとりまとめを担当する池田さん。仮設と地域をつなぐ仕掛け人です。



池田さんは、集会所の鍵の管理も担当しています。時間があるときは、集会所を開放し、お湯を沸かして前を通る住民に「元気かなあ」と声をかけたり「お茶飲んでいっかんか？」と誘います。立ち話もいっけいけれどせっかく用意してくれた机や椅子も活用しないともったいない。

池田さんの優しい手招きで自然発生の仮設カフェは大盛況です。



池田さんの趣味は、グラウンドゴルフ。遠征で県外の大会にも参加します。仮設団地の中でもグラウンドゴルフ愛好者やこれから始めたい人も多くいることを知り、チームを結成しました。週3回朝から、30名近くの方が集まり笑い声や歓声を響かせています。仮設団地以外の方も多く参加しています。



ひろえ
広江



「サテライト ひろえ」

助けられる人から助ける人へ

広江に集結した支え合いの心

7月の豪雨で真備地区以外の倉敷市内でも、道路の冠水や家屋の浸水、かけ崩れ等多くの被害がありました。

水島地区のコスモタウン広江団地は7日の夜に土砂崩れで家や道路に大きな岩や大木、泥が流れ込みました。

倉敷市災害ボランティアセンターが開設した「サテライトひろえ」には、市内外から多くのボランティアが集結しました。

5日間にわたるサテライトの運営を支えたのは、約千人のボランティアと地元住民・地元の団体による助け合いでした。広江の住民は「被災者」でありながらもサテライトの運営に携わる「支援者」でもありました。

困ったときはお互いさま、向こう三軒両隣を越えたつながりが、被災された方々の心を癒し、これからの地域づくりの大きな支えとなっています。



住民も運営ボランティアに参加



ボランティア活動の様子

広江の被災者支援に、若いママ達も立ち上がりました。

いつもは、三世代交流サロンでわが子を見してくれる地域の「じいじ」から「避難している子どもたちに、食べるものが欲しい」という連絡を受け、被災地以外の地区に住むママたちは、すぐにいつものサロン会場に集まり、炊き出しの準備を始めました。



ママたちによる炊き出し支援は、計4回にわたって行われました。何気ない日頃からの世代を超えたつながりは、お互いを支え合い、助け合える関係になっていました。「助けて」と「助けたい」が自然と重なった瞬間が被災地にありました。



広江の支えびと

「災害の記憶を風化させずに後世へ」

しろうち とよじ
城内 豊司さん（倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会）

また、「今回の災害を風化させることなく後世に伝えることも大切。みんなの記憶を記録として残し、災害時の備えの大切さを伝えたい」と資料づくりに余念がありません。

サテライトひろえが閉所した後は、ほぼ毎日、その後も市災害ボランティアセンターが移転してからも運営を担い続けています。

分かりあえて協力して、和気あいあいと運営することができた。ボランティアさんが本当にたくさん来て助けてくださった。感謝している」



梅干しを食べている城内さん。猛暑の中、熱中症予防の梅干しは欠かせません

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会水島支部長として活動する城内さん。コスモタウン広江団地の土砂災害が起きた今回、災害ボランティアセンター「サテライトひろえ」の運営を担いました。

「当初はみんな真剣、一生懸命だったから意見がぶつかり合うこともあったけど、だんだんと



サテライトひろえを開所した日、水島支所にも張り紙をして説明をしている様子



しもついで 下津井

「下津井地区 災害ボランティア」

『思いを馳せる』 地域を支える原動力

平成30年7月豪雨により、土砂崩れに見舞われた下津井大畠地区しもついでおばたけでは、地元へ思いを馳せる人々の「つながり」が地域を支える原動力となりました。

被災者のため、地元自治会を始め、倉敷市災害ボランティアコー
ディネーター連絡会児島支部、岡山県立倉敷鷺羽高校の男子バスケ
部、女子バスケット部、男子バレー部、レスリング部、下津井・赤崎・
郷内高齢者支援センター、介護老人保健施設オアシスK-3、株式
会社トーカイ倉敷営業所、岡山県社会福祉士会等、「つながり」が
「つながり」を呼び、総勢約60名の方々が駆けつけてくれました。

今回の活動では、年長者は「知恵」を、若者は「体力」を出し合
い、お互いに得手不得手を補いながら、被災者のため、家屋や庭に
入った土砂を運び出しました。

「世代を超えたつながり」、これからの地域に欠かすことのできな
い「力」が、下津井大畠地区に生まれた瞬間でした。



平成31年1月現在の様子

皆で土砂を運び出した後のお庭には、野菜も育っ
ており、被災者の方は、「自分達だけではどうし
ようもなかった。本当に感謝の気持ちでいっぱい
です。本当にありがとう」とおっしゃっていました。

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会児島支部は、日頃から災害ボランティアコーディネーターの学習、他団体との情報交換やネットワークの構築、防災減災意識の普及活動のために活動されています。

下津井大畠地区の被災現場においては、現地調査からはじまり、日頃からのつながりを活かして、情報収集や協力者を募る呼びかけ等に尽力しました。



倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会 児島支部



岡山県立倉敷鷺羽高校レスリング部

倉敷鷺羽高校レスリング部の生徒の皆さんは、「今まで災害現場といえば、報道を通してしか見たことがなかった。今回、災害ボランティアを経験して、直に足を踏み入れてこそ理解できる被災地の痛みを知ることができた。災害はいつ起こるかわからないので、今回の経験を活かして、今後も困っている人や、地域の力になりたいと思う」と強く語ってくれました。

下津井の支えびと

【デニムで復興支援プロジェクト委員会】

下津井地区東西地区社会福祉協議会 X (株)晃立 X 高木ソーイング(株) X (株)モリフロッキー X 下津井郵便局

西日本豪雨において被災された方々の一日も早い復興を願って、地区社会福祉協議会と児島デニムの企業等が共同し、児島産デニム約300本を被災者に提供しました。委員の方々は「被災地の状況をj知ること、何が求められているのか、自分達には何ができるかが発見できた。同じ倉敷市民同士、支え合っていきたい」と語ってくれました。



このプロジェクトの発起人、わしゅう下津井東地区社会福祉協議会の高木会長(上)は、「被災した人に少しでも前向きになってもらいたいんじゃあ」と一本一本心を籠めて準備をされました。

感謝を伝える作戦会議



呉妹地区社会福祉協議会は発災した7月から毎月欠かさず、これからの地域づくりについて協議を続けています。

感謝を届ける

あの日、助けてくれた人たちに感謝の気持ちを伝えたい

7月7日、水島から実家のある真備へ駆けつけてくれた兄弟の話、近所3人で協力して救助をしてくれた尾崎の人の話、その人たちが暗くなるまで何十人もの住民の命を助けてくれた話…。

7月下旬から定期的に開催される、呉妹地区社会福祉協議会の会議では、いつも水に浸かったわが家から救い出してくれた「あの人たち」のことが話題にあがります。

「助けてくれた人たちに何かの形で感謝の気持ちを伝えられないだろうか。」そんな声から作戦会議が始まりました。

みんなで協議をし、地域の声として、人命救助をしてくれた方を表彰してほしいという要望を備中県民局へ届け感謝状を贈呈してもらえることになりました。

災害発生時の人命救助、避難所や仮設住宅での暮らしの支援、地域でのつながりやコミュニティの再構築等、この章では、被災地で生まれた、多様な支え合い活動とその効果について紹介します。

ボート使い救助
7人に県感謝状



謝状

眞也(父)三郎、眞重市
喜傳計五万一千二百の
式十五と云。二四ノ連
最町助富田一は「長機
が、無事」に招けられた。
我學中、産木をかき入
けて、「これ」を運した。

開聖寺には原木隆
太朗事が「黒氣」と行動
方をたてたまふ」と感
謝状を贈呈し、一人一
人から當時の様子を書
いた。

他に謝状を贈られ
したのは次の皆さん。(敬
称略)

近藤治義、山口保雄、
村本忠宏(前都立高野
町職員)、高口登三(総
持市中興坪井茂廣(同
山口國文区議員))

(水鏡佑吉)

2015年11月21日 山陽新聞朝刊 26ページ

「あのときはみんな一生懸命でちゃんとお礼が言えなかったけど、助けてくれてありがとう。」

人命救助にあたってくれた人がいること、その感謝の気持ちを忘れずに、しっかりと声とかたちにして返そうとする人と組織があることの両方が、地域の大きな財産です。



茅野 匠さん（災害支援団 Gorilla）



このカヤックと茅野さんの行動が多くの方を救助しました。（写真上）



蘭小学校で運営したゴリラカフェの様子。ゴリラのイラストは小学校の先生が描いてくれました。（写真右）

7月7日、豪雨により真備のまちが水に浸かったことを知った茅野さんは、いてもたってもいられず、すぐに自分のカヤックを車に積み、救助活動を開始しました。

茅野さんの勇気ある行動は、12人の住民の救助につながりました。

その後、茅野さんは、避難所となっていた、蘭小学校に憩いのスペースとして「ゴリラカフェ」をオープン。避難者や支援者関係なしにみんなが、ホッとできる居場所をつくりたいとの思いで、多くの人の心をあたためました。

現在も、支援物資を持参しての訪問活動や地域のなかでのカフェ運営等、ゴリラは真備のまちを今日も全力で走ります

救助活動
×
地域支援

命と暮らしと
地域を守るゴリラ



地区社協による被災の実態調査



浸水した場所をみんなで確認し、どこを通れば避難できるのかを話し合いました。

実態把握

もう二度と同じ思いはしたくない

今回の災害の被災状況を地域の人に知ってもらい、家族や近所で避難場所や避難するタイミングについて話をする機会をつくってほしいという思いを込めて、呉妹地区社会福祉協議会は独自で地域の実態調査に乗り出しました。

地区社協の役員で地域を歩き、住民の声を聞くことにより、呉妹地区は全・半壊合わせて約54%の被害があることがわかり、その結果を地元の社協だよりに掲載し地域の方に届けました。

実態調査で把握した被害状況と地域の声は、次に同じような災害が発生した際に、日頃から家庭や地域でどう備えるかという協議へと活かされています。

呉妹社協だより 臨時号
平成30年10月
呉妹地区社会福祉協議会

7月の大水害から3か月が経ちました。被災された皆様は大変な苦労が絶えずおられることでしょう。

さる4月某報の「がんばろう呉妹」の企画に、大勢の地域のご協力をいただき、被災のうちに終わることになり、本誌にありがたくございました。

その後、呉妹地区では国の災害対策委員会を聞き、話し合った事項をまとめたので、お知らせします。

1 呉妹地区の被害状況（このうち、全壊・半壊は、全戸数の54.1%）

被害状況	全戸数	割合
全壊	4名	54.1%
全壊	262軒	
半壊	90軒	

現在、被災された自宅の2棟、避難所、仮設住宅、みなし仮設住宅……等で生活されている方は、とても不安な生活を余儀なくされています。一日も早く、家は地域に帰り、日々の生活が営まれることを願っています。

2 避難についての再確認
※「避難場所指定書」が、市町村から、事前に指定された避難場所へ、早めに逃げましょう。

特に「避難指示」が出た場合は、家族はもちろん、隣近所にも呼びかけて、絶対に逃げましょう！

※避難場所（事前にその場所に行ってみましょう！）
水害（河川洪水）のときは、一時的に指定する避難所ならどこに避難されてもかまいませんが、地域が浸水する場合は、指定された避難所へ避難する必要があります。

土砂災害、地震のときは、一時的に指定する避難所ならどこに避難されてもかまいませんが、指定された避難所へ避難する必要があります。

高層・密集のときは、一時的に指定する避難所ならどこに避難されてもかまいませんが、指定された避難所へ避難する必要があります。

社協だより臨時号



エプロンばあばの復興マップ



かわいいイラストと凝縮された暮らしの情報。
今すぐにもお買い物に行きたくなります。

不思議なことに、こんなに便利で多くの人が見たことがあるこのマップ、誰が描いて貼っているのか不明なんです。分かっているのは、「エプロンばあば」という名前とマップからあふれる「ばあば」の被災地へ向けた愛情…。

これからも「エプロンばあば」の情報発信から目が離せません。

平成30年12月現在、すでに発行回数は11回を数えており、地図が新しくなるたびに、再開した店舗の情報やイベント情報、暮らしのお役立ち情報が追加され、真備のまちが活気を取り戻していく様子を実感することができます。

情報発信

誰が描いているの？
愛情たっぷり謎の復興マップ

真備町では、時々、とてもきれいであたたかみのある、手書きの地図が掲示されたり、配られたりしています。



掲示板

道路に面した個人宅のガレージ。本来は情報発信をする場ではありません。

しかし本当に地域住民の目に留まりやすいのは、そういった「通りすがり」の場所なのかもしれません。



「情報」というきっかけで人が集まり、さらに情報が深まります。



情報発信

まちで見かけた掲示板
キーワードは
「通りすがり」に目に入るところ



服部地区

住民
運営の

物資
拠点



7月8日の服部地区



服部の自主支援物資拠点

考えるより先に体が動いた

服部地区では、発災後直後の7月8日から同地区に住む西川由貴子さんと水川美千子さんが協力して物資支援を開始。
当時は発災後間もないということもあり、自家用車の荷台から支援物資を配ったとのこと。

お二人は、「こういう時だからこそ、決まった人が動くのではなく、動ける人が動くべきであると思う。考えるより先に体が動いた」と当時を振り返ります。

また、7月20日からは、物資支援の活動を継続するため、服部地区社会福祉協議会の協力のもと、同地区内の住民の方々100人以上とともに、尽力しました。



岡田分館

届くのは「もの」だけじゃない

岡田地区では、岡田分館を物資配付の拠点として、地域の方士で物資の管理や仕分け、整理を行ってきました。そこは、訪れる人にとつての再会の場でもあり、相談やおしゃべりができる場にもなっていました。
物資による生活を支える活動だけではなく、同じ不安や悲しみを共有する住民同士だからできる、気持ちを支える活動がそこにはありました。



話しながら心が癒されていきます。

衣類は選びやすいようにディスプレイしたり、姿見を置いたり、住民のアイデアによる細やかな気配りがありました。



岡田分館内の自主物資拠点の様子



二万分館

運営を担ったまちづくり推進協議会の皆さんは、交代で受付やちよつとした相談に応じ、被災者の暮らしと心に寄り添いました。

避難所となっていた二万小学校からも近く、避難所から次の生活の場に移される際にこの場所で、衣類や食器類等の生活雑貨やお米等をお渡ししました。

二万地区まちづくり推進協議会が行った生活支援物資の配布拠点です。

新たな暮らしを応援



地域の人からたくさんの善意と物資が寄せられました。

糸田団地



手づくりの物資拠点だからこそ、ぬくもりや安心感がそこにはあります。

手づくりだから心地よい

糸田団地町内会が団地内のお宅の駐車場を借りて開設した物資拠点です。

自宅をのぞくついでに立ち寄れる手軽さと見知った顔に会える安心感で、いつしか町内の集いの場となりました。

団地のライングループの立ち上げや忘年会の開催など団地の結束を担う一因となりました。



上有井公民館



上有井避難所お別れ会の様子、すでに退所した方も久しぶりにのそぎにきてくれました。

現在は避難所としての役割は終わっていますが、避難所での支え合いでさらに高まった一体感はさらに地域を活性化してくれそうです。

発災直後は、地元の住民・団体からも多くの支援を受けていましたが、自主避難所として、「何もかもしてもらいう支援は今後の暮らしのために良くない」と避難者同士で話し合い、調理や掃除等の役割を決めていくことにしました。

自主避難所

みんなで避難できて本当によかった

上有井公民館は、市の指定避難所では、ありませんでしたが、ご近所同士が声をかけ合い、被災していない上有井公民館を目指したため、コミュニティがあまりバラバラになることなく、アットホームな雰囲気でも同生活が送れたそうです。



年末年始はクリスマス会やもちつき大会など内容が盛りだくさん。



県外から来てくれた美容師のボランティアさんがカットをしてくれました。



尾崎ひまわりサロンの同窓会



この同窓会は今後も継続して開催されることになり、その場で連絡網を作成しました。日頃からつながりのある人同士なので、連絡網完成まで10分かかりませんでした。

集会所はまだ使用できませんでしたが、屋外でテントや机を用意して、みんなでもとても大切なひと時を過ごしました。市内各地から懐かしい顔ぶれが集まりました。発災前とほぼ同じ人数が来てくれたことが皆さん一番の喜びだったようです。

毎月、宮田団地集会所で開催していた尾崎ひまわりサロン。発災後、団地の住民もほとんど自宅を離れて暮らしていましたが、みんなが集まって以前のようにおしゃべりや食事を楽しむ同窓会が企画されました。



これまでも、サロンの運営を支援してきた大重さん。この日のために手づくりスイーツを作ってきてくれました。

集いの復活

ずっと待ち焦がれていた再会の日



岡田小学校避難所「集いの場」 岡田仮設団地談話室サロン



サロンの様子。12月は自分だけのクリスマスリースやツリーを手づくりしました。



岡田避難所サロンではカプラを積みあげ、塔の高さを競いました。(写真左)

地元住民もサロンの応援に関わってくださり、小さな談話室は活気にあふれています。

現在、岡田仮設団地談話室で月に2回、定期的に住民が集い交流できる場となっています。

「憩いの広場」というスペースを活用し、体操やレクリエーションを行う「集いの場」を開催しました。

仮設団地での集い

集える居場所をみんなで応援

日本赤十字社岡山県支部の支援を受けながら、岡田地区での居場所づくりが進められています。

岡田小学校の避難所では、みんながくつろげる



楽しく寄合所



大将の包丁さばきと、大きなお魚に子どもたちは大興奮。



居酒屋ならではの雰囲気が会話を盛り上げます。



被災者支援を続ける松下さん夫婦。

みなし仮設の集い

広がっていく、
新しい「居場所」

発災以降、「食べ物屋」として自分たちができることを考え、被災者への支援を続けている、新倉敷駅近くにある居酒屋「楽らく」の松下さんご夫婦。

みなし仮設での生活で、寂しい思いや不安な気持ちを抱えている被災者同士が、お互いに情報交換ができる場を作りたいという思いから、子ども食堂「楽らく寄合所」を開催しています。バラバラになった人が集える場ができ、そこから生まれたつながりから、さらに支援の輪が広がります。



まびの集いin水島

水島鶴の浦のJFEふれあい会館を会場に、みなし仮設住宅在住者の方を対象にした交流会を開催しました。

当日は水島地区の民生委員さんもたくさん参加され、自分の担当地区を紹介し「困ったことがあったら何でも言ってください」と元気づけてくれました。

「慣れない生活の場だけど、頼れる人の顔が分かることがとても心強い」と参加者も喜ばれていました。



仲良しになるきっかけづくりとしてみんなでゲームを楽しみました。つつい夢中になってしまいます。

孤独にさせないつながりづくり

まびhouseコミュニティ

「おかえり」って言ってあげたい

真備町に帰りたくても帰ることができない人たちに、居場所を提供したい。倉敷駅西ビルの「磯の家」では毎月2回、お茶会が開催されます。

ここではとにかく自分の家のようにゆつくりと過ごしてほしい、私たちはそんな方に「おかえり」って言ってあげるお手伝いをしたい。

イベントを主催するまびhouseさんは、お茶会に加えて、被災地を回りながら支援物資を届けたり、訪問活動を通じて困りごとの発見や相談・対応を行っています。



まびhouseさんが用意してくれた支援物資で、イベントホールがいっぱいになりました。



高齢者のつどい（玉島富田地区）



当日は真備町や建設型仮設住宅のある柳井原から40名の参加があり、バス3台を巡回させて、会場の富田小学校まで送迎をしました。

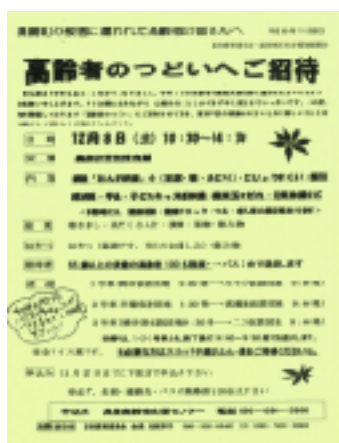
お芝居や歌、踊りを楽しみ、昼食をご一緒するなど、富田と真備に新たなつながりが生まれました。

帰る際には、みんな笑顔でお互いにいつまでも手を振っていました。

地元イベントへ招待

私たちがからでできる「手招き支援」

富田地区の愛育委員会と地区社会福祉協議会が開催する「高齢者のつどい」では、真備町の被災者にも、一緒に楽しい時間を過ごしてほしいとの思いから、イベントにご招待しました。



いつまでも笑顔で手を振る富田愛育委員会の植田会長（左）



霞橋リバーサイドグラウンドゴルフ（玉島上成緑地）



グラウンドゴルフのプレーもそのあとのおしゃべりもとても楽しい。

スポーツ交流

「一緒にやろう」
が元気を生む

高梁川の河川敷の玉島上成緑地では、毎週3回グラウンドゴルフの練習が行われています。その集まりに、被災後、みなし仮設住宅で生活を送っている方も参加され、玉島地区の方と一緒に練習するようになりました。声掛けから参加者が増え、なかには「みんなに会えるから」と、河川敷から遠い仮設からの参加もあります。

「被災後、自宅の片付けで疲れがどつと出たけど、またグラウンドゴルフをするようになって元気になった」と、参加者は話します。

住み慣れない環境で不安な思いを抱えている方にとって、運動によるリフレッシュだけでなく、情報を交換し合ったり、愚痴を言い合ったりすることもある、心のリフレッシュの大切な場になっています。



グラウンドゴルフは個人競技だけど、地域をつなぐチームプレーでもあります。



歌声喫茶

と楽 歌音

響け、希望の歌声

岡田分館に「青い山脈」が響き渡りました。岡田地区では3年前に歌声喫茶を立ち上げ、毎月実施していましたが、豪雨の被害でメンバーの多くは被災し、会場となる分館や機材も壊れ、活動ができないう状況になっていました。

発災から2ヶ月後、これまで歌に元気をもらってきたメンバーから、徐々に「こんな時だからこそ集まろう」という再開を望む声が高まりました。限られた準備期間のなか、みんなで一から作り直した会場には、100人以上の住民が集まりました。

いつも歌声喫茶の1曲目で合唱する「お約束の歌」を歌い、みんなで一緒に前を向きました。



1曲目の「青い山脈」が始まると、一気に会場の熱気が上がります。



下にある歌詞を見るより、「前を向いて歌おう」と声をかけ合いました。



imim (イムイム)

赤と白が織り成す、「心の復興」

イメージカラーが赤のkoheiと白のkenの男性デュオimim。これまでは神奈川県を拠点に活動し、赤と白の衣装のとおりに紅白歌合戦出場を大きな目標に掲げて日々努力を重ねています。

8月から真備町でボランティア活動に携わりながら、避難所や地域のイベントに数多く出演。

「復興アーティスト」として地域の住民と心を通わせながら、歌に元気と地域愛をのせて発信中です。

二人の人物や、心を揺さぶる歌唱力とメッセージに惹かれ、現在真備町を中心に、imimファンが急増しています。サロンでのミニコンサート等で地域の居場所づくりを力強くバックアップしてくれています。



赤のkohei(左)と白のken(右) 歌と笑顔でみんなを元気にしてくれます。



12月に開催した単独ライブでは、地域の方がimimうちわを作って参加者に配るほどの人気ぶり。





オレンジボランティア

傾聴

オレンジは寄り添いの色

災害により、住環境や暮らしのリズムが大きく変化することで、心配されるのが認知機能の低下や地域での孤立化です。

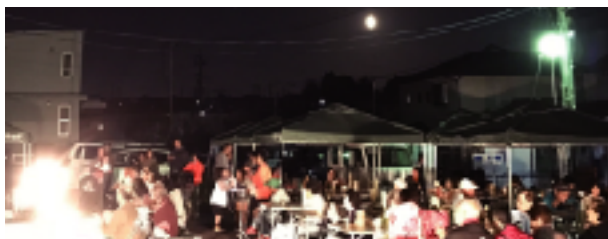
オレンジボランティアは、避難所等を訪問し、一人ひとりに寄り添いながら傾聴や談笑を行うボランティアグループで、認知症の理解と支援のイメージカラーであるオレンジの服やリングを身につけて活動します。

10月には、オレンジ色の満月と竹灯籠の灯りに照らされて、みんなで一緒に交流する「オレンジの集い」も開催しました。



避難所での認知症の方の対応や予防について、講座を行いました。

市外・県外からも、たくさんのボランティアさんが活動にきてくれました。



オレンジの集いの様子。普段なかなか外出できない方もボランティアが送迎や会場での見守り等を支援しました。



写真洗浄ボランティア

写真洗浄

思い出を守りながら、未来へ進む

「今までは、暮らしていくのが精いっぱい、とても写真のことまで手が回りませんでした。これだけ時間が経ってしまったから、もう手遅れだと思っていたけど捨てることができないんです。」写真洗浄の依頼に来た女性には涙を浮かべてそう話し、まだ写真の救出が可能であることを知ると、安堵の涙をこぼされました。

かけがえない思い出を出せるかぎり、元の場所へお返しするため、写真洗浄ボランティアチームによる「写真洗浄会」は災害ボランティアセンター等で開催されています。

体力、年齢を問わず、みんなが担い手となれるこのボランティア活動は、住民やボランティア同士が作業を通じて交流したり、作業をしながら同じ目的や達成感を共有することができ、新たな支え合いの地域づくりの一助になると期待しています。



地域に出向いて写真の洗浄方法を学ぶ「出張写真洗浄会」も各地区で開催しています。



そーる訪問看護ステーション

そーる訪問看護ステーションは事務所が被災した後トレーラーハウスを支援団体の協力のもと設置し、そこで地域の方が集い、交流できる拠点づくりを進めました。

全国から寄せられた支援物資を置き、支援や情報が届きにくい在宅生活者との心と情報を通わせながらニーズの把握や寄り添い支援を展開しました。



トレーラーハウスで地域支援

ぶどうの家ランチ

うの家。10月には、真備町辻田にぶどうの家ランチを開所しました。

支援物資の提供や、浴室の開放、炊き出しや音楽イベント、復興に向けた勉強会等ぶどうの家は、利用者さんの生活の場であると同時に地域みんなのつながりの場となっています。



事業所による地域支援

利用者も事業所も地域とともに

長く地域活動を進めてきたぶどうの家。



真備連絡会

真備連絡会が中心となって開催してきた、「地ビールと音楽の夕べ」は8月に再開し、以降は地域住民の心が通う場所として毎月第3土曜日に定期開催しています。

これまでも定期的に集まり、情報交流やイベントの企画・実施をしてきましたが、発災後は一層の連携を強化するべく、多くの職種が、それぞれの所属でできること、連携によって広がることを検討し続けています。

多職種連携

多職種のつながりから生まれた「お互いさま」

真備連絡会は、真備町の高齢者・障がい者・児童関係事業所等でつくられた、顔が見える関係と連携づくりを目的として組織された連絡会です。



「地ビールと音楽の夕べ」は12月から「まちコン」と名前を変えました。

お互いさまセンターまび



お互いさまセンターまびの開所式では、移動支援を担うスタッフへ運転者講習を行いました。

真備連絡会の協議から、11月には「お互いさまセンターまび」が開設しました。

困りごとをお互いに助け合い、誰もが町の一員として暮らし続けていけるよう「お互いさま復興」を目指し、NPO法人岡山マインドを事務局に真備連絡会の有志によって運営されています。

暮らしのなかでちょっとした支援が必要な方の電話相談に応じたり、交流会の開催、移動支援、掃除・買い物・入浴などの生活支援を行います。



災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議

多機関 連携

それぞれが今取り組んでいることや地域の声や課題、連携を通じてできることをみんなで練り合わせる作戦会議の場になっています。

倉敷市災害ボランティアセンターの立ち上げから、毎週定期的に開催している連絡会が「災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議」です。毎週火曜日の夕方から被災地の支援を行っているたくさんの支援者が集まります。



和やかに、熱く、連絡会は毎週開催しています。

定例の会議が終わっても、熱意のこもった協議やそれぞれが思い描いた夢の語りで二次会、三次会が続きます。
この場所ので出会った人たちができたチームもあります。
「被災地を支えたい」という強く優しい思いが集うこの場所から復興に向けた取り組みが生まれています。

まび再生ベース竹燈
(たけあかり)。
災害ネットワークおかやまのメンバーによって構成されたチーム。
ボランティア派遣やイベント開催、技術講習会等を幅広く行います。



災害の恐ろしさも 助けを求める地域の声も

同じ目的を持った仲間との連携のチカラも知った



倉敷市災害ボランティアセンター



一日のボランティア参加者数が1000人を超える日もありました。

平成30年7月豪雨により、真備地区では大規模な浸水被害、水島地区のコスモタウン広江団地では土砂災害など、倉敷市でかつてない甚大な被害が発生したことを受けて、倉敷市社会福祉協議会では、7月11日、倉敷市災害ボランティアセンターを玉島長尾に立ち上げました。

10月25日に真備町川辺に、ボランティアセンターを移転しました。移転後は、スタッフが地域を歩き、訪問によるニーズ調査を行うなど、地域に寄り添った支援に力を入れました。



ボランティアさんへ感謝のメッセージ



ボランティア活動の前線基地、サテライトの様子



倉敷市真備支え合いセンター



支え合いセンターの職員が皆さまのお宅にお伺いします。

この事業の活動拠点として真備支所に「倉敷市真備支え合いセンター」を開所しています。
「これからの暮らしが不安」「もっと情報してほしい」「地域で交流したい」等あなたの声を聞かせてください。

見守り支援

あなたの声を聞かせてください

倉敷市では、仮設住宅等に入居されている方が、引き続き地域のつながりのなかで、豊かで、安全・安心な生活を送ることができるよう、仮設住宅での生活を終えたあとも、真備町での生活に戻れることができるように「被災者見守り・相談支援等事業」を実施しています。

○倉敷市真備支え合いセンター

倉敷市真備町箭田1141-1（真備支所2階）
TEL 086-698-5115

○倉敷市健康長寿課被災者見守り支援室

倉敷市西中新田640番地
TEL 086-426-3380



高齢者支援センター（地域包括支援センター）

地域を知り地域とあるく支援センター

倉敷市では、介護・保健・医療・福祉に関する総合的な支援を行う拠点として各地区に高齢者支援センターを設置しています。

これまでも、地域の課題解決に向けて住民と一緒に協議し、寄り添い支援を続けてきました。

発災後、真備地区を担当する支援センターはすぐに地域に飛び出し、被災状況や要援護者・支援者の情報収集に走り、他の地区の高齢者支援センターもその動きをサポートしつつ、避難所支援やイベントの開催、訪問調査等被災者へ寄り添い続けています。

これからの復興の鍵を握る地域の大切なパートナーです。

高齢者支援センターからのお願い

『最近引っ越してきた方』
『地域から孤立しているかもしれない方』

など、皆さんの周りに、ちょっと気になる高齢者は居ませんか？

平成30年7月豪雨災害では、高齢者を主な、被害に及ぼす方が多く見られました。
被災後、多くの方が仮設住宅で生活を始めています。
でも皆さんの周りに、被災して引っ越してきた方もいるかもしれません。
高齢者が孤立しないよう、高齢者支援センターへご連絡ください。

全ての皆様が住みやすい地域にするため、ご協力、よろしくお願い致します。

市内の高齢者支援センターが協働して作成したチラシ。
慣れない地域で不安になったり、孤立している被災者がいたら、高齢者支援センターまでご一報ください。



大高地区では、みなし仮設住宅に住む住民を対象に、交流会を開催し、あたたかい時間を共有しました。



地域の課題と強みを共有する場「小地域ケア会議」も高齢者支援センターの尽力で、地域の倉庫で復活しました。

「情報」・「居場所」・「支援」ももっとあなたのそばに

5 生活支援コーディネーターがつなぎます

生活支援コーディネーターをご存知ですか？
生活支援コーディネーターは、別名「地域支え合い推進員」とも呼ばれ、一人ひとりの元氣な暮らし、支え合いの地域づくりを、住民や関係機関と一緒に推進する「つなぐ専門職」です。



生活支援コーディネーター（左から水野、山本、松岡、戸川、松本）

この事例集は発災から半年の地域の支え合い活動を中心にまとめたものです。

今回の豪雨災害において、生活支援コーディネーターは、「今だからその地域支援」を合言葉に、それぞれの被災地区を担当し、まず、地域の方に地域の実情を教えてもらうことから始めました。

「情報」や「居場所」・「支援」・「支え合い意識」をつなぐなかで、これまで住民同士の関係性から生まれた、たくさんの「お互いさま」が、住民手づくりの「支え合い」に広がる場面に数多く出会い、ともに活動することができました。

豪雨二モメケズ、復興の原動力となっている、地域が培ってきた文化や取り組み、なじみのつながりを、私たちは「地域の宝物」と呼んでいます。

今後も、倉敷の「地域の宝物」を、生活支援コーディネーターは関係機関と協働しながら、寄り添い、磨きあげるお手伝いを続けてまいります。

生活支援コーディネーターによる被災地支援



通いの場の再開支援



仮設団地の居場所づくり



情報発信



他機関との連携



話し合いの場への参加



新たな地域活動のバックアップ



「豪雨ニモマケズ」

発行：平成31年3月

発行元：倉敷市健康長寿課地域包括ケア推進室

連絡先：〒710-8565 倉敷市西中新田640番地

☎ 086-426-3417 FAX: 086-422-2016

メール：wlfgsc@city.kurashiki.okayama.jp

URL：http://www.city.kurashiki.okayama.jp/

制作：社会福祉法人倉敷市社会福祉協議会

連絡先：〒710-0834 倉敷市笹沖180番地

☎ 086-434-3301 FAX: 086-434-3357

メール：kurasyakyo@kurashikisyakyo.or.jp

URL：http://kurashikisyakyo.or.jp/

